

#### 4 “発展途上”にある中国、四国他方

中国、四国地方に目を向けますと、ここは、たとえば近畿、九州などに比べて、少々実践園は“手薄”の観があります。もちろん石井方式の採用を検討中のところも多々あると聞いていますから、手薄というより“発展途上”といった方が正確かも知れません。

さて、島根県には、斐川町に出東幼稚園があります。本書の「漢字を学ぼう」で詳細にその記録が展開されています町立出東小学校の、いわば付属幼稚園の形で存在しているのですが、昭和34年に出東幼児学級として開設され、39年から出東幼稚園として発足しました。

昭和58年度で園児数62名、2クラスという小ぢんまりした幼稚園。石井方式は、51年、小学校の採用と同時に導入され、今日に至っています。園長は、小学校の校長と兼務で、現在、中間幸夫先生がその任についています。

実践方法としては、当初から、壁、時計、黒板、さらに園歌まで、目につくものはすべて漢字で示すようにし、板書もできる限り漢字で書くように務め、その他、漢字絵本、カード、漢字表などを使って、漢字に親しむ環境づくりに尽力してきたとのことです。

子どもたちのなかでも、とくに、出東小学校に在籍する兄や姉を持

つ園児は、漢字に対する興味がよりいっそう深まっているようで、自分たちから「漢字の勉強するか」といって自由な取り組みを進んで行なっているといえますから、ここでは、小学校と一体となった漢字への対応が十分に図れるすばらしい利点に恵まれているといえるでしょう。

広島は、中国地方のなかでも、比較的实践園の多い県といえます。そのなかで、たとえば広島市内の恵心幼稚園は、昭和51年から、石井先生の講習を受けたのち、漢字学習を取り入れました。父兄からは、最初“英才教育”のようだと、多少の反発があったそうです。この英才教育のようであるという誤解は、他園でも導入時に父兄の声として出てくる場合があるようですが、小さい子どもに何やら文字を教え込むという詰め込み式教育で、果たして子どもたちが喜々として取り組むことなどあり得まじょうか。これはまさに、石井先生がいつも説いているように“適時教育”であって、漢字を吸収するに最もふさわしい時期に合わせて、それを子どもたちに**示しているだけ**のことです。しかも、子どもたちは、これまで、数多くの実践園の経験が明らかにしてきましたように、大変強い関心を持って、驚くほどの吸収力を見せ、漢字に親しんでいます。

前にも書いたように、実際に、子どもたちがどんな風に漢字に対応しているかを見聞きすれば、一挙に氷解する誤解といえます。ですか

ら“百聞”も“一見”もしていない状態での思い違いそのものを否定せずに、理解を求める行為は繰り返し続けていかなければならないでしょう。

恵心幼稚園では、教材として、漢字絵本を中心に、その他、歌なども歌詞は務めて漢字で表わし、子どもたちの目に触れるもので、漢字を使用できるものはなるべく漢字カードにして、貼り出すようにしています。子どもたちの漢字への関心も高まり、一様に読書に対する抵抗感が失せ、園の外で、子どもらが漢字を読みあげたりすると、しばしば小学校の何年生かと聞かれることがあるといいます。

広島市以外では、安芸郡海田町の東海田幼稚園が熱心な実践園として知られています。園長の京極恵海先生によれば、すでに十年余り前から漢字学習を開始したそうです。知人に、石井先生の書いた『一年生でも新聞が読める』をすすめられ、それを読んでから、大阪の小路幼稚園の井上文克園長にアドバイスを受け、本格的に始めるようになったといいます。当初、父兄は石井先生のお話を聞いてもらったりして、すぐ納得したのですが、逆に園の先生方は、しりごみをしたとのこと。もちろん、実践を始めてからすぐにその消極性はなくなりましたが、今後は、もう少し、研修、研究活動を活発にして、質の高い漢字教育にしたいと、京極先生はつけ加えていました。

四国には、はっきりとわかっている実践園の数は、それほどありま

せん。山口、香川、愛媛の各県に数園といったところのようです。

そのなかの一つ、愛媛県松山市には、愛光幼稚舎が、比較的以前から石井方式を採用して来ました。

園長の河原次瞭先生によりますと、昭和49年に、石井先生との出会いがあり、その時から石井方式の研究を始めたといいます。当初、約60名の園児に試験的に石井方式を実施し、翌50年から本格的に開始、現在では、約350名の園児が漢字に取り組んでいます。

河原先生は、この石井方式を、知能を刺激する有効な方法として、また言語教育の充実を図るに最適な方法ととらえているそうで、初期の試験的指導のさい、二歳児に、一回50分、週二回の指導を十か月続けて、漢字を四百から五百字、完全に覚えさせることができたといい、その効果のほどを裏付けたものとして語っていました。

現在では、漢字絵本から、漢字を7、8字選んで、それを一週間分として、クラス全員にそのカードを渡して学習させる方法を取っているそうです。また、二週間に一度は、土曜日研究授業を開き、先生方の指導技術の向上を図っています。

河原先生は、「まだまだもの足りない感じがします。いっそう理論的にも実践的にも充実させるとともに、近隣への普及活動にも力を注ぎたい」と意欲満々でした。